



ビオトープ・ニュース049

発行日 2013/01/06

発行：日本ビオトープ管理士会 徳島支部
 事務局：徳島市山城町東傍示5-281 新弘測量設計㈱内
 事務局長：東條芳頭 TEL：088-622-5688

■ビオトープ・サロン 2020年徳島の未来に向けて…みんなの思いを組織の使命に！ No.6

新年、あけましておめでとうございます。

ビオトープ・ニュースも、5年目を迎えました。情報交換紙としてスタートしましたが、時が経つのは、過ぎて振り返れば早いものです。今年はマンネリ化を脱却したいですね。読者の皆様のご寄稿に期待しています。

さて、今年は、徳島県の生物多様性元年となりそうです。生物多様性地域戦略として、徳島県版が公開されることでしょう。行政、企業、県民が一丸となって、生物多様性を支えるビオトープ保全に取り組みましょう！

と言うことで、048号に続いて「2020年徳島の未来に向けて（2010年3月発行）」の第6弾を紹介いたします。
 （編集局）

【食糧自給率】

記者：矢野英治（会員）

県土面積の75%を森林が占めている徳島県においても、第一次産業としての農林業の経営は大変困難な状況にある。農林水産業は自然や環境に最も接する事が多く、またその影響を敏感に受けやすい産業であることから、第一次産業への取り組み方は、自然環境に対する認識度の指標と言えるのではないだろうか。

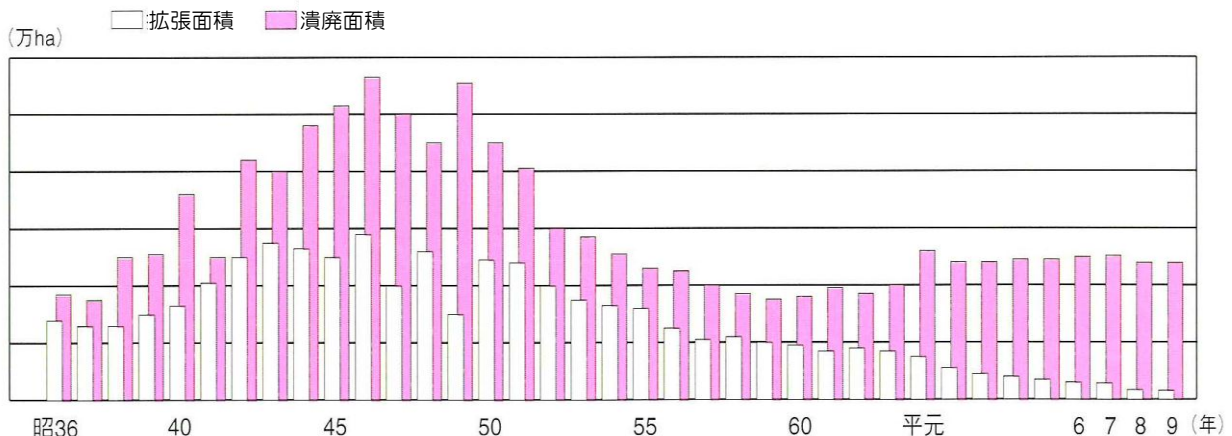
そのような人類生存の根幹を担う仕事でありながら、エコノミー社会においては、第一次産業の重要性を認識する人は非常に少なく、日本の食糧自給率は40%に満たないものとなってしまった。つまり、国内でまかなえない60%は国外の食物を食いあさっているわけである。時には”グルメ”と称して！そして、その外国での食糧生産地がいかに自然破壊的な生産状況にあっても、見えない所の惨状には無頓着である。

一方、国内の農林業では、外国からの低価格な輸入産物に対抗することが出来ず、生産意欲がますます失われてしまうという、悪循環に陥っている。そもそも、国内で十分に生育している森林木材や、減反政策に振り回されている近くのお米よりも、遠い外国から、はるばる輸送費を使って、運び込まれた物の方が安いという経済バランスには、多くの人が矛盾を感じているのではないだろうか。かつて天然資源の少ない日本が、海外の先進国と対等に付き合うためには、科学技術の発展しかないと言われ、その輸出額の反動として、第一次産業がお荷物のように取り扱われてきた政策に、憤りを感じている人は少なくないはずである。

この他にも色々な要因から、中山間地での第一次産業は「持続困難」な苦境に立たされており、ある面では生物多様性に貢献して来たはずの人間活動さえも、停止せざるを得なくなった耕作放棄地と、限界集落が少なくないと聞いている。最近開催されたシンポジウムでも、ある山村からの出席者が、「生物多様性も大切だが、私の所では人間が絶滅危惧種になっている。」という切実な発言をしていた。これが自然保護活動と、人間活動の最前線で戦っている人々の、本音のように思えた。経済的にも身体的にも精神的にも余裕がなくてこそ、自然への感謝と思いやりが生まれるのではないだろうか。

ひと昔前までは保護されていたはずの二ホンジカが、今や増えすぎて有害鳥獣駆除の対象となってしまう、県内だけでも年間に3800頭もの殺処分を目標としていることなど、都会で何不自由なく暮らしている人々には、想像も付かないような現実がある。また、各地で見られる自然保護活動や、巨樹や自然の観察会でも、自然の現状を広報して、認識を高めてもらいたいという思いと同時に、地域活性化策としての村おこしの願いが、強く込められている。

もともと中山間地で暮らす人々は、都会で暮らす人々よりもずっとエコロジィな生活をして来たはずである。そしてその人たちのお蔭で、山の緑や水が守られて来たという恩恵も受けたはずである。都会での利便さを追求したしわ寄せを、限界集落と言われる所に暮らす人々に強要するものではなく、都会で暮らす人々も山や水を守るために、自分の負担を担うべきではないだろうか。そして、10年後には食料の自給率を、せめて50%以上にはしたいものである。（2010年3月）



日本における耕地および耕地の拡張・潰廃面積の推移 (農水省「耕地及び作付け面積統計」など) より作成
 Transition of cultivated land areas in Japan.

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう！

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。 (編集局)

【生態学の択一問題：正答と解説は次号で紹介】

問049：次の文のうち、なわばり行動について述べているものはどれですか。

1. 樹液に集まったコガネムシやアリが互いに場所取りを演じている。
2. 2匹の蝶が互いに絡み合うように飛んでいる。
3. アリマキの群れにアリが集まっている。
4. ムクドリが、夕刻、市街地の樹木に群れている。
5. ヨシ原で、オオヨシキリがさえずっている。

■前号048の解説(1級施工部門の記述問題)

メダカ、ナマズ等の魚類が水田と連続する用排水路等に生息する箇所では、これらの魚類が水田を繁殖場として利用することが考えられます。そのため、用排水路等と水田の水口・水尻の落差をなくす構造とすることが重要です。ほ場整備の条件により落差が生じてしまう場合は、魚類が用排水路等と水田の間を移動することができるように小型魚道を設置する方法も考え必要があります。

畦畔については、過度な除草剤散布を控えたり、カバープランツのようなもので被覆したりすることをせず、適度な刈り取り除草を行うことにより、本来の畦畔植生を維持することが重要です。

冬期はガン・カモ類のような冬鳥の餌場、越冬地となるように水田に水を張ることも重要です。また、冬期湛水により早春に産卵するカエル類が産卵場として利用することができます。

このように、水田に生息・生育する動植物の生態を考慮したほ場整備や維持管理を行うことが重要です。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■ビオトープ・サロン 熱血オジサン奮闘記！～フログ・ビオトープ気延の里～

寄稿：石井町のわんぱくおじさん(ビオトープ気延の里)

【たぬきのトイレ】

12月10日 晴れ 2日の日曜日に大勢の仲間のお手伝いを頂き、45年間に亘り耕作放棄された畑(3メートルの笹藪)を開墾しました。そこを整理しようと思った時のことです。なにやらこんもりと盛り上がったところに一見、犬の糞のようなものが。一人の人が「たぬきのトイレじゃ」と。

そうか、これが噂に聞く“タヌキのため糞”か。二箇所あったんですが一箇所にはゲリ便が。

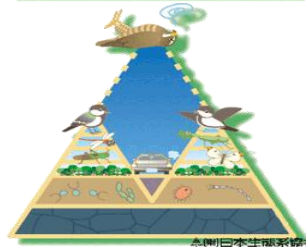
ビオトープ管理士のKさんに電話をしてさっそく報告したところ、Kさんいわく「寒くなったんで腹を冷やしたんやろ」。納得！。(編集局より：ホントに納得ですか？管理士さんも時には冗談も…まあ、大目に見てあげてください。)



■ビオトープ・ナビ 雑学コーナー 環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類(VU)

(編集局)

【2012年は県内各地でハヤブサが相継ぎ衰弱保護】



生態系ピラミッド(公益財団法人日本生態系協会)

昨年の2012年は、徳島県内の各地で、傷ついた猛禽類とともにハヤブサがあいつぎ保護されたそうです。外傷はなく衰弱とのことで、徳島県傷病鳥獣保護収容所や野生鳥獣救護ボランティアの方々、野生復帰を目指し保護飼育しているとのこと。

ハヤブサは、河川・湖沼・海岸などに生息し、和名は「速い翼」が転じたと考えられていて、急降下時の速度は360km以上(飼育下の実験では390kmの報告有り)だとか。食性は動物食で、主にヒヨドリやハトなどの1.8キログラム以下の鳥類を食べ、獲物は飛翔しながら捕えたり、水面に叩きつけて捕えたりするそうです。

ビオトープ・ニュース034でも取りあげましたが、数年前からの話題として、「冬にスズメが餓死」「スズメが60年前に比べ個体数が10%に減った」「北海道各地で突然スズメが姿を消した」「英国ロンドンでは過去25年間で9割減り政府が原因究明に乗り出した」とか。野鳥に限らず、多様な生物がつながりあって循環する生態系に支えられて生存する私たちへの警鐘とも言えるかも知れません。

ハヤブサなどの猛禽類は、生態系の頂点に位置し、下位の生きものによって支えられています。そして、その基盤は土地(場所)です。生態系上位種がレッドリストから外れる日が訪れることを願って、自然と共存できる土地利用に努めましょう！

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。 ふるってご参加ください！ 編集局

【E-mail: kanv@nifty.com URL: <http://biotopetokushima.yu-yake.com>】